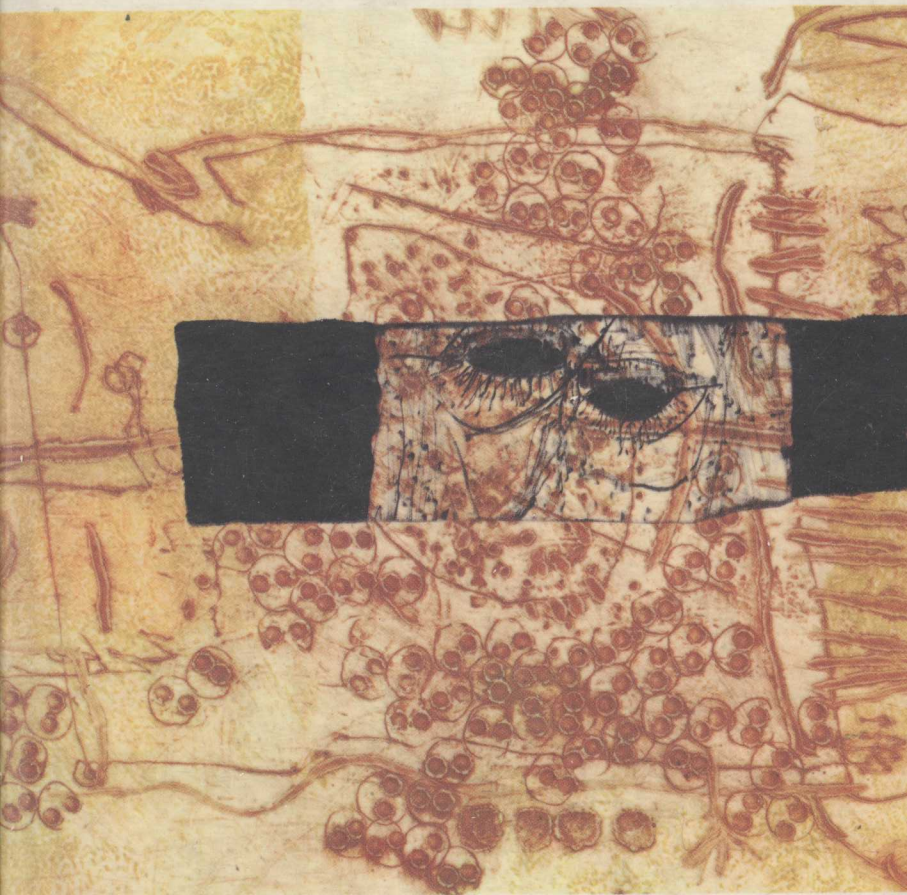


掌の光景 梅原稜子



掌の光景 梅原稜子



文藝春秋

■著者略歴

昭和17年10月4日、愛媛県八幡浜市に生れる。
早稲田大学文学部国文科卒業後、中央公論社に
昭和49年2月まで勤務。
本名、松代智子

掌の光景

昭和五十年八月五日 第一刷

著者 梅原稜子

発行者 檉原雅春

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三

郵便番号 一〇二

電話 東京03二六五局一二一一

振替 東京七八七四三

印刷 凸版印刷

製本 中島製本

万一落丁・乱丁の場合は
お取替えいたします。

作品集《掌の光景》

目次

夏の家

5

饗応

65

車輪の鳴る海

123

掌の光景

181

掌
の
光
景

A・D 装画
坂田 赤坂
政則 三好

夏の の 家

夕食が済んでから、晴子は食卓の空き皿をそのままにしてしばらく夕刊を拡げていた。読み終えらともう一度初めから見出しを拾い、ひとつの番組に一行ほどしか与えられていないラジオの案内なども丹念に追った。

新聞を畳んで、皿を流しに運ぼうとして立ち上った時、体の奥に鋭くはない痛みが湧いた。短い糸が血管の中を順番に巡っていくような曖昧な痛みである。椅子に坐っていればいられないこともない。彼女は両手を食卓の端につけ、浅く腰掛けて、誰かの話でも聞くような姿勢でじっとしていた。すると今度は皮膚が筋肉に引っ張られる感触が拡がり始め、全身が重たくなってきた。晴子は洗面所で確かめてみた。予想した以上のことにうろたえ、咄嗟に、もしこの部屋でそういう事態になったら自分は一日たりとも住んではいけない、という思いが胸を衝いた。

手当てを済ませて晴子は、ひと月ほど前に訪れた都心の病院の診察券を取り出した。あ

と一週間ほどすればそれがまた必要なはずだったのである。入院の設備もある病院だから夜間でも医師はいるのだろうか、こういう場合、どれほどの時間が許されるものなのか、そちらの方を確かめたかった。彼女は電話番号を記してある診察券を持って、アパートの二階通路の中央にある呼出しも兼ねたピンク電話へ立った。

手摺と屋根だけがついた通路に春先の肌寒い風が勢いよく吹き抜けていく。ダイヤルの穴にも送話器の穴にも土埃がついている。一瞬、それは顕微鏡で拡大した粒子のように目に突き刺さってきた。

十円玉が落ちて、電話はすぐに繋がった。看護婦らしい女性に、病院に懸っている者であることと症状を告げると、案の定、予期していた状態を言い指し、すぐに来るようにと言う。

『大丈夫でしようか、時間』

そう尋ねる晴子に、

『当直の者がおります』

と、時間外などと言っておれないではないかというふうに素っ気なく答える。体の方はそれまで変化しないのか、と晴子はあわてて言い直し、三十分はかかる場所のことも述べた。『そんなことはありません。とにかく、すぐにおいで下さい』

こちらの知識のなさを笑うような明るい返事である。電話を切ってから、止められてい

るので滅多に掛けはしないが空で覚えている光雄の家の番号が数字を並べた音おんのまま浮かんだ。そして彼がまだ関西へ出張中であることを思い出して、家にいて断られるよりは助かる、とほっとした。

部屋に戻ると、晴子は食卓の皿を流しへ運んだ。もし何かがあった時、跡を見られぬようにというひとり住まいの癖で、急いでいる時でも流しに放ったままということだけはないのだが、日頃のその気持が余計、強まる。彼女はボールに水を張って、荒洗いをしない皿を片っ端から沈めた。が、腹部に痛みが突き上げてきて、まっすぐに立ってられない。それを諦めると、寝間着や数枚のタオルや肌着を紙袋に詰め、厚地の紺のスカートに穿き替え、コートを取り出して、手持ちの金を全部、財布に入れた。

扉に鍵を掛けてから、晴子は足許が気になった。買って間もない黒革のハイヒールである。おろしたてではないが、こういう折には憚られる。踵の高さや新しさのことではない。扉を開けて、彼女は黒革の低い靴に急いで履き替えた。

彼女は今でも、靴をおろす時、踏込みで一旦履いてから下駄箱へ仕舞っておく。おろしたての履き物はいけなかった。郷里の近くの島で臨海学校の時に水死した中学の同級生も、入院先で亡くなった遠縁の娘もそうであった。本人ではないが、晴子の家を手伝っていた中年の女性も新しい草履で里帰りをした時に息子に死なれた。その女性は、藪入りの時、家の方で贈るのが習慣であった草履をそのまま履いて帰ったのである。

いくつか重なるにつれ、晴子はそれが偶々のこととは受け取られず、おろしたての履き物はいけないという迷信を信じるようになった。実際に出遭った以上、その迷信を退けようとするのは迂闊なことに属すると思われるのだった。

タクシーはコンクリートの橋脚の間を勢いよく潜り抜けていた。高速道路にするのだった、と気がついたが、入口は疾うに過ぎており、次の入口へ行くためには混んだ道路へ廻らなければいけない。信号で止まる時よりもスタートする時に震動が体に響く。上体を浮かすようにして腰掛けたまま、彼女は頭上を緩やかに巡っている高速道路の滑らかさをしきりに考えていた。

繁華街に入った。よく磨かれた車の窓硝子が、流れる光景にセロファン紙でも被せたように、あたりが艶めいている。外の明りを受けて硝子の厚みの間に細かく耀く青や緑の粉があった。晴子はそれをまた粒子のようだと感じた。

車が国電に沿って走り始めた頃、金属で筋肉を締められるのに似た鋭い痛みが増してきた。彼女は少しゆっくり行ってくれるように頼んだ。運転手は黙って頷いたが、速度はいっこうに落ちない。彼女にはそれが、こんな腥い客は早く降ろしてしまいたい、と様子に気づいて舌打ちしているように映った。

ひと月ほど前、光雄が訪れた晩、晴子は診察の結果を言った。自分では様子に気づいていたが、知らせたのはそれが初めてであった。突然の話に光雄は当惑顔を見せた。少し表

情を変えたまま、押し黙って聞いていたが、彼女が述べるのにつれて、目に輝きがよぎった。だが、すぐさまそれは消え、硬い顔つきになって、ようやく、「言われても困るよ。

責められているみたいだな」と答えた。晴子は、光雄らしい素直な反応だと思い、そういう事態に出遭って結果を先立たせて考えるでしかない、男という立場に気の毒さも覚えた。大抵の場合、胎児に対して女より実感が乏しいにしろ、産まない前提で、形になるやならずのうちに告げられた時の頼りなさはどうなんものであろう、とも思い、晴子はそれを掻き立てたくてなおさら体の調子を説明した。処置についてだけは光雄の口から言わせたくて触れないでいると、彼は「どうしようと言うものでもないだろう」と、彼女も承知しているはずの結婚はしないことやらいずれは別れるということやらを含ませて、断定を下す言い方以上に棘を込めるのであった。が、晴子は冷淡だとは受け取られず、とまどいと驚きを悟られまいとして無理に構えた、けれども生来の薄情な者ほどにはあしらい流す術を知らない愚直さを感じた。ふたりして悔いめいたことを述べあわないで済むのも助かる気がした。そして、光雄が一瞬浮かべた輝きの表情は忘れるまいと思った。祝福を受けることのないものに与えられた、甲斐の薄い、だが正直な祝福だ、と嬉しいのだった。

その後も光雄はそのことで彼女を構ったり、様子を訊いたりはしなかった。その退けぶりは、細心で、徹底していた。彼の中にこだわり深くなっていく過程を見るようで、晴子は領け、ありえない場面を想像した。「冬で可哀想」と言う彼女。「ほんとだな。どうせな

ら春だけ生かされてる方がよかった」と彼。「春も駄目だわ。新緑にでもなったら、却ってこちらの気分が減入っちゃう」「じゃ、いつだって駄目だ。せいぜい滋養を取って、いい思いをさせてやろうよ」――。もし、晴子の方から口を開いたとしても、それはありえないやりとりであった。ばかりか、彼は晴子の体を労わるようなことも言えなかった。口にすれば光雄も気が楽になるであろうに、と彼女は封じている自身に快感を覚えた。ひとことも触れられないのを見るにつけ、彼女はさらに封じてみたくなった。時期も知らせないで自分で済ませ、終えたあとで報告だけしようと決めたのである。女の側に責任があるという律義な引受けからでも、光雄を庇ってのことでもなかった。そういうやり方が結果的には彼を虚仮こけにすることになるのや厭いとな女と思われるのも承知した上で、光雄の応じ方に彼女も応じたまでであった。

外語学校やビルの並ぶ暗い一郭に五階建の病院がそこばかり窓々に明りを浮かべて佇んでいた。この時間に訪れるような急いそいた者なら、そこへ入れば助かるという感じをいちように受けそうな、しっかりとした明りである。門前で車を降りて晴子は、窓辺を見上げながら思わず安堵の溜息をついた。だが、玄関まで続く芝生沿いの道は前回よりはるかに長く感じられる。彼女は、ひとすじ、脚を伝わって下りる粘い感触を覚えて、立ち止まった。靴下の細かい網目に絡むようにしてそれはふくらはぎを這い、足裏に届いた。と、もう一度同じことが繰り返された。素足のふくらはぎに赤い糸を引いて歩いている知恵遅れの娘

を郷里の町で何度も見たようだ、と晴子は一瞬、思い起こした。

玄関の大きな硝子扉越しに、無人の待合室が見え、中央で創設者の胸像が黒々ときらめいている。扉は動かない。へ急用の方はこのベルを……と記した呼び鈴がようやく見つかった。現われた看護婦は彼女の来意を訊いてから、

「エレベーターで三階までいらして下さい。手前の詰所に看護婦がおりますから」と自分で頷きながら言う。

スリッパに履き替えようとした時、中底が薄赤く滲んだ靴がふたりの下に晒された。タオルを取り出して足裏を拭こうとする晴子に、看護婦は、

「いいです。そのまま、すぐ行って下さい」

と叱るように命じ、彼女の荷物を持って自分もエレベーターに乗った。ビニールのスリッパの肌が足裏でべとついてくる。

器具の多い、明るい部屋で彼女はひとまず普通の寝台に寝かされた。

「ご家族のかたは？」

と別の年配の看護婦が尋ねる。晴子は、家族がいないことを述べ、

「連絡できるはずの者も、今日は留守なんです」

と事実にかこつけて言い足した。

「ほかに頼めるかたは？」

二、三の知り合いが浮かんだが、こういう場面につきあわせたくはなかった。彼女は、それもないと答えた。

「今晩は病院に泊まっていただきます。ですから、来てもらうのは明日でもよろしいのです。連絡だけ、今夜じゅうに取っておきます」

病状でも尋ねる具合に真上から覗き込んで看護婦は早口で述べた。

「それはちょっと……」

と晴子は口籠った。

光雄を関わらせたくないことは、事情が変わっても同じである。いや、なおさら、来られたくない。今度はよりはっきりと彼女ひとりの責任からの事態である。しかも、産もうとしていた者の事情の変わり方とは違う。騒がせるには、光雄にではなく別のものに対して引け目があった。

「どこもない、じゃ困ります。万一、何か生じた時、どこへ連絡すればよろしいのです？」

二重顎の線をくっきりと刻んで看護婦は晴子を見下ろした。

聞きながら晴子は、ひとつの契機が目前で姿を現わしたり立ち消えたりしているのを感じた。光雄の家の電話番号を告げる。彼の母親が出る。会ったこともなければ彼女の名前さえおそらく知らない母親は、病院からという危急な感じのする、しかも名前だけで産科の病院からとわかる連絡に、ふたりの事情やこれまで覆われていた関係を察するであろう。